



中国における都市化と移住者の重層的展開—広東省 深圳市を中心として—

連, 興檣

(Degree)

博士 (文学)

(Date of Degree)

2015-03-25

(Date of Publication)

2017-03-25

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第6364号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1006364>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



論文内容の要旨

中国における都市化と移住者の重層的展開 —広東省深圳市を中心として—

<論文要旨>

論文題目 (外国語の場合は、その和訳を併記すること。)

中国における都市化と移住者の重層的展開 —広東省深圳市を中心として—

氏名： 連興檜

神戸大学大学院人文学研究科博士課程後期課程社会動態専攻

指導教員氏名 (主) 藤井 勝 教授
(副) 平井 晶子 准教授
(副) 樋口 大祐 准教授

(注) 4, 000字程度(日本語による)。必ずページを付けること。

問題提起

本論文は、広東省深圳市における現地調査をもとに、改革開放後の中国における都市化と都市移住の実態を明らかにしようとするものである。

グローバル化の進展により、国境を越えた人の移動が増加している。現在、先進諸国が経済停滞期に入りつつあるなかで、世界経済が、中国をはじめとした新興国の急成長によって大きく支えられていることは確実である。1978年に改革開放政策が実施されて以来、中国が大きく変動し続けているのは、都市への急激な人口移動と大きな関連性がある。このような都市化に伴った人口移動は、現在もなお劣らぬ勢いを見せており、それに注目することは中国の社会変動を知る手がかりとなる。人口移動と都市化の相互関係をみると、農村から都市へと転身した深圳は、特殊性を含みつつも、中国の急速な都市化現象を伺うことができる代表的な都市といえる。

本論文では、中国の都市化現象を踏まえた上で、農民工のような低学歴移住層とホワイトカラーのような高学歴移住層を中心に、深圳で実施した調査から都市移住者の実態と定住性について考察し、深圳の都市構造を明らかにした。深圳の都市形成は一種独特であるが、農村から都市へ移行する一つのモデルケースとして、今後、中国内陸の農村地方や地方都市の発展に応用されることが可能となるだろう。そこに、深圳を研究対象都市とする意義がある。

第一章 中国における都市化の進展について—都市社会学研究の知見から考える

都市社会学研究の知見から、西洋 - アジア、また先進国 - 途上国の都市成長の類似点と相違点を示し、中国的な都市化プロセスを整理し考察した。中国の世界での影響力が高まる背景には、急激な社会変動がある。欧米諸国の都市化とは異なり、中国の都市化は比較的短期間でなされ、莫大な農村人口の都市移住と政府の主導によって促進されたことがその特徴である。現在、中国の国内移動が活発化しているが、自由な人口移動とはいえない。それは、戸籍制度による規制が、農村 - 都市間に「国境」に似た無形の壁を作ったからである。都市化の大きな展開には、1978年から施行されるようになった改革開放政策は大きな役割を果たした。1992年の鄧小平の「南巡講話」は、改革開放をさらに加速させた。同年、中国経済の方針は社会主義計画経済から社会主義市場経済へと転換した。それ以降、都市化に対する経済的要素の影響が高まっているが、政治的要素による影響もまた依然として強い。その理由は、農村 - 都市間の二元構造をもたらした戸籍制度が本質的に変わっておらず、移住先の戸籍をもたないと、戸籍を保有する者と同等の待遇を受けられない

からである。

第二章 深圳の都市化プロセス—漁村から都市への歩み

改革開放後、経済特区に指定された深圳は、農村から都市へと華麗なる転身を果たした。今までの都市形成とは異なり、深圳は政治的につくられた都市であり、優遇政策や経済発展に有利な地理的な条件に恵まれ急成長を果たしてきた。その結果、僅か30数年間で深圳は都市化された。経済発展だけでなく、深圳は「土地使用権の譲渡」、「国営企業の改革」、「雇用制度の改革」などさまざまな面で改革の先駆としてその活躍を見ている。このような急速な工業化と都市化に伴い、深圳では全国各地から移住者が集中し、その人口は1979年の30数万人から2013年の1800万人超に上昇した。それが原因で、深圳は「移民都市」と呼ばれている。移住者の多くは、都市化過程で現われた城中村に居住しているが、城中村ではさまざまな問題が存在するため、それに対する改造・再開発が進んでいる。それにより、移住者が安価で住めるところが減少している。

第三章 城中村からみた都市化の一断面—民間信仰と移住者

1992年と2004年の二回の農村都市化を経て、深圳には行政単位としての農村がすでになくなり、そのほとんどが都市社区へと転換され、城中村として残っている。城中村は家賃が安く、農村からの出稼ぎ労働者の住居問題を解決してきた。それと同時に、城中村の元村民は離農しても家賃収入で生計を立てることが可能となった。城中村の多くは祠堂や廟が残存しており、その機能の変容から村民の民間信仰の衰退が顕著にみられる。民間信仰が衰退し始めたのは、1949年以降であり、とくに文革期による取り締りが厳しかった。1980年代以降、全国各地、とりわけ農村地域では宗族文化など迷信と思われていた民間信仰の復興が進行したが、農村地域であった深圳ではほぼ進んでいない状態にある。無論、祠堂や廟を再建し、また都市化される直前に正門に「牌坊」を建てた城中村は少なからずみられるが、実質、民間信仰の再構築はできなかつたのである。その大きな要因は、農村から都市へと転身した深圳において急速な工業化と都市化が進んでいるためと考えられる。そうしたなかで、城中村に住む移住者（主に潮州人）の廟の利用がみられ、それを通じて中国の地方伝統文化の大都市での再現・再構成が可能であることが確認できた。

第四章 深圳における出稼ぎ農民工の定住意識と「市民化」

1980年代以降の中国では、急速な工業化と都市化に伴い、農村から都市への人口移動が活発化し現在も続いている。1980年代後半からの「民工潮」現象と2000年代半ばから発生した「民工荒」現象を経て、現在、農民工の移動先は沿岸部の大都市だけでなく、内陸へも拡大しつつある。しかし、戸籍制度や土地制度による制限が彼らの都市定住を阻害してきた。従来では、出稼ぎ農民工がある程度の出稼ぎ期間を経てから帰郷するのが一般的であったが、近年、出稼ぎ期間の長期化や新世代農民工の意識変化に伴い、農民工の都市

での定住について大きな課題となっている。そのため、農民工の「市民化」についての議論が盛んである。農民工の都市での主観的条件となる定住意識と客観的条件となる市民化について分析した結果によると、農民工はさまざまな原因で都市に続けて滞在したいというが、定住に関しては不確定である。彼らの定住意識に最も影響しているのが経済的要因で、家族・個人に多大に影響を与えている。従来と比べ、農民工の就職口が広くなり、都市への移動もより自由になったため、彼らは長期的に都市で働くことが可能となったが、農民工が制度的に市民化されることは、今なお難しく、大きな課題である。

第五章 中国における都市移住者の特別な移住プロセス—深圳の潮州系自営業者を事例に

現代中国における都市移住現象の一環として、本章では、深圳に住む潮州系自営業者を事例に、農村から都市への移住プロセスの多様性について検討した。潮州系移住者は、単なる農村出身者ではなく、彼らは漢民族の中でも特殊性を持つエスニック・グループである。それは、彼らの宗族文化、海外移民文化などから伺うことができる。現在、潮州人は、海外への移動から国内での移動に転向し、その高い移住性は依然として維持されている。他地方出身の華僑と同様に、潮州系華僑は移民先社会に多大な貢献を果たしており、類似した事例は中国国内においても見られる。例えば、潮州系移住者は深圳の急成長に大いに貢献してきたのである。一般農民工と同様に、潮州人も親族・友人関係に頼り都市へと移動するが、多くの者は他の潮州人からの影響を受けて商売に従事している。また潮州人ネットワークへの利用を通じて、潮州系自営業者は比較的安定した生活を手に入れ、都市生活に経済的適応している。潮州系自営業者の多くも完全に市民化されていないが、一般農民工に比べ、彼らは自分だけでなく家族を呼び寄せて深圳に定住できている。これは、歴史の長い移住文化を持つ彼らの特別な移住プロセスである。

第六章 中国における若年高学歴移住者の動態—深圳のホワイトカラーを中心に

近年、都市への人口集中には、農民工だけではなく、高学歴者の大都市への移動も増加している。その背景には、高等教育の大衆化と市場経済への転換などがみられる。それにより、高学歴層の二分化が進行し、新中間層の主な構成員としてのホワイトカラーと、「蟻族」のような高学歴ワーキングプアの集団とに分かれている。ホワイトカラーの定住性についてみると、農民工と比べ、その移住と就業は能動的である。彼らは家族の影響を受けて移動する傾向があるが、就職の際は、会社の説明会や就職サイトを通じて仕事を見つけるのが一般的である。農村・小都市出身者は大卒低所得者の「蟻族」のように、故郷では自分の専門が生かせないため都市で働き続けることを望んでいる。大都市出身者の場合は、出身都市以外の都市で働くことは経験を積む過程としてとらえており、彼らは出身都市に帰る傾向がある。彼らの多くは経済的に安定した生活を求めるよりも、自分のキャリアに有利となることを優先させている。また、定住意識の規定要因として家族の影響が大きいことが明らかになった。筆者が調査したホワイトカラーは客観的中間層といえるが、彼ら

の階層帰属意識は下方に偏っている。それは、中国独特の社会階層構造による結果である。

結論

本論文では、筆者は深圳の事例に依拠しながら、中国的な都市化プロセスと多様な移住者について議論してきた。

影響力に差異はあるが、政府が主導する都市化は深圳以外にも中国全土でみられる。深圳の人口の急上昇も中国全土で活発化している人口移動を背景に発生した。つまり、深圳は優遇政策によってつくられた都市であるが、改革開放後の中国の急速な都市化と急激な人口移動を代表する都市でもあることが確認できた。他都市と同様に、深圳にも都市化過程で現われた城中村が多数存在している。城中村は、農村から都市化された深圳の縮図のような場であり、その形成において移住者は欠かせない存在である。移住者の城中村に対する影響は、経済面だけでなく、城中村の文化においてもみられた。その影響は、深圳全体にも見受けられる。現在、依然として厳しい戸籍制度が人の定住に影響を与えているが、移動の自由化と都市滞在の長期化に伴い、移住者の都市社会に対する影響もまた大きくなり、その重要性が高まりつつある。農民工のような低学歴層やホワイトカラーのような高学歴層など多様な移住者を通じて、都市社会の構造をうかがうことができる。

深圳と他都市との関係性のほか、農村から都市化された深圳は、中国の農村・城鎮における都市化のモデルケースとして捉えることが可能である。深圳の都市形成は一種独特で再現されることは困難であるが、この事例を通じて農村地方における中国的な都市化の可能性を提示することができたと考える。

論文審査の結果の要旨

氏名	連 興 楨
論文題目	中国における都市化と移住者の重層的展開—広東省深圳市を中心として
要 旨	
<p>本論文は、中国の東南沿海部に位置する深圳市を事例として、改革開放政策によって本格化する現代的都市化の様態を、都市移住者の多様かつ多層的な展開に焦点を当てながら解明したものである。統計的なデータ、各種の資料の利用はもちろんのこと、現地でのフィールドワークを積極的に展開することを通じて、移住者の生活・意識・行動の内側に深く切り込み、移住者の実像を浮き彫りにしている。深圳市は、中国政府が改革開放政策のもとで政策的に創造した都市であり、現常住人口約1000万人の9割以上が移住者と推定される。このことは深圳市が、大都市としての歴史を有し、なおかつ改革開放期に一層大都市化した北京市や上海市などとは違った独特の都市であることを意味すると同時に、改革開放政策による中国の「現代化」と連動した都市化の過程や論理をもっとも典型的に内包していると言うこともできよう。このような特質をもつ深圳市の分析をより有効に行うために、本論文はとくに移住者の重層性に注目し、各層ごとの移動・移住の姿を鮮明にさせるという手法を採用している。以下では、問題意識を提示した序章および、各章の論点を重層的展開という側面から整理・要約した終章を除いて、各章ごとに本論文の特質と意義について要約する。</p> <p>第一章「中国における都市化の進展について—都市社会学研究の知見から考える」は、社会学における都市理論の古典と現代的な展開における関心や立論に立ち返りながら、中国における都市化の研究課題を模索する部分と、第2次世界大戦後の中国革命から現代に至るまでの中国の都市化のプロセスが論じられている。つまり前者では、19世紀のヨーロッパ社会学からアメリカ・シカゴ学派に至る都市論の系譜を整理して、アーバンイズム、ネットワーク、コミュニティといった都市分析の基本概念を析出するとともに、M・カステル、E・ウォーラーズテイン、S・サッセン等の近年の展開をも検討して、権力、不平等、移民、階層化、ジェントリフィケーションなどの現代都市分析の概念を提示することによって、欧米と中国との間の差異をふまえて、中国の都市社会学研究を都市社会学上に定位することを試みている。その上で、後半部では、第2次世界大戦後の新中国誕生期にまで遡りながら、都市化の特質を全時期にわたって考察することによって、中国における都市研究の固有のテーマや課題を明らかにしている。</p> <p>第二章「深圳の都市化プロセス—漁村から都市への歩み」は、本研究の中心的研究対象である深圳の基本的な性格を考察したものである。深圳は中国の一般の大都市と異なり、都市としての歴史は浅く、改革開放政策開始とともに国家主導で都市開発が行われたモデル都市であり、その結果、外来人口が圧倒的な比重をしめる、その意味で中国最大の「移民都市」であると捉える。その実像を示すために、統計データや都市施策によって現状を丁寧に考察するとともに、「移民都市」形成のプロセスを重視して、近代以前の農村時代にも遡って歴史的に都市化過程を丹念に分析している。その結果、第三章以下の実証的研究にとって有効な導入部となっている。</p> <p>第三章「城中村からみた都市化の一断面—民間信仰と移住者」は、「城中村」とよばれる、都市域内の農村の変容を実証的に解明したものである。「城中村」は中国の都市研究の一つの重要なテーマであるが、移住者の圧倒的な流入によって都市化した「移民都市」深圳にとって「城中村」のもつ意味はとりわけ大きい。本章では、</p>	
主査記載 氏名・印	藤 井 勝

地元民である本地人の地域社会に、外部からの各種の移住者（労働者である農民工、自営業者を中心とする潮州人、高学歴の新中間層など）が流入して構築された新地域社会として「城中村」を描き出し、「移住都市」深圳の縮図であると捉える。この認識にもとづいて、一つの「城中村」でフィールドワークを実施し、都市化する「城中村」の構造の変容を、そして地域社会の変容の象徴として、在来の地域信仰・祭祀が移住者の手によって再構築される様相を捉えている。このように都市化の過程と具体的に結びつけられた「城中村」分析は貴重である。

第四章「深圳における出稼ぎ農民工の定住意識と『市民化』」は、移住者中の農民工を一つの階層として取り出し、中国における研究の成果を踏まえつつ、自身のインタビュー調査（15例程度）にもとづいて農民工を解明したものである。とくに都市社会の発展と密接に関係する、農民工の都市への定住問題に注目し、定住を定住意識（主観的条件）と「市民化」（客観的条件）の両面から分析し、彼らが戸籍制度の壁を超えて、都市民として深圳の都市発展を安定的に担う階層になり得るかを検証している。その結果、農民工の地位の低位性や不安定性などの要因により定住は促進されにくいと分析し、「移民都市」でさえも、彼らの社会的な統合や包摂が弱い現実を明らかにしている。中国における都市化の固有の問題性をあらためて提起した意義は大きい。

第五章「中国における都市移住者の特別な移住プロセス—深圳の潮州系自営業者を事例として」は、潮州系住民を一つの社会層として取り上げ、インタビュー調査（約20例）を積極的に行いながら、移住の特質を考察したものである。つまり、潮州地方は近代以前より海外への移住熱が強く、東南アジアへの進出などがとくに顕著であり、新中国誕生以降は移住が抑制されたものの、改革開放期になると国内移住が増加し、深圳は目的地として重要な位置を占めるようになったとする。そして、潮州人は当初は農民工として流入しながらも、一般の農民工とは異なり、固有のネットワークを利用しながら早い時期に自営業に転身し、深圳の定住することによって、深圳の自営業者層の重要な部分を構成するとともに、一部は事業の成功によって都市富裕層へと上昇移動していることを明らかにしている。従来の中国の研究では、農民工の出身地方文化と移住の関係、また移住者と自営業者層の関係について十分な解明がなされておらず、本章はこの面において大いに貢献をなすものである。

第六章「中国における若年高学歴移住者の動態—深圳のホワイトカラーを中心に」は、移住してきた高学歴層、とくにその若年層を対象として、自身が行ったインタビュー調査（約20例）をも利用しつつ、都市の新中間層の実態を描き出したものである。つまり、中国における若年高学歴移住者は、「北漂」や「蟻族」の現象によって知られるように、大都市で必ずしも安定した職業を獲得できないといった問題を抱えているが、「移民都市」深圳では市政府の高学歴者優遇政策のもとで条件のよい職を獲得して「市民化」することは比較的容易であるとする。しかしながら、キャリアアップ志向の強さなどの理由によって深圳への定住志向は弱く、農民工とは違った形ではあるが、彼ら自身も流動性が高い状態で大都市のなかを浮游しているという論点を提示している。このような分析によって、中国大都市が非常に流動的であることを多面的に捉えることに成功している。

以上の審査結果に鑑み、本審査委員会は論文提出者・連興楨が博士（文学）の学位を授与されるに足る資格を有するものと判定した。

審査委員

区分	職名	氏名	区分	職名	氏名
主査	教授	藤井 勝	副査	教授	油井 清光
副査	教授	白鳥 義彦	副査	准教授	平井 晶子
副査	准教授	佐々木 祐	副査	名誉教授	佐々木 衛